貧に落ち切れ

月日のやしろとなられた教祖は、親神の思召のまにまに、
「貧に落ち切れ。」
と、急込まれると共に、嫁入りの時の荷物を初め、食物、着物、金銭に到るまで、次々と、困っている人々に施された。

（稿本天理教教祖伝 第三章 みちすがら）

教祖はなぜ、貧に落ち切る道を通られたのでしょうか。
それは、外に向かっては困っている人を救けずにはいられない行いであり、内に向かってはおやしきの掃除であり、未来に向かってはたすけ一条の道を自らお示しくださることでした。
稿本天理教教祖伝逸話篇に

『貧に落ち切れ。貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分からん。』
とあり、また教祖伝では、
「物を施して執着を去れば、心に明るさが生れ、心に明るさが生れると、自ら陽気ぐらしへの道が開ける、と教えられた。」
とあります。
実際に教祖の施しは激しく徹底されていて、一般的に人々が頼りとする家の財産や格式など、世俗的権威はすべてを手放され、しかも心明るく陽気に通られました。
「この家へやって来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。」
この親心に、私たちが手本とするひながたの道があります。

本島大教会布教部（晴）

天理教本島大教会

教祖140年祭

教会の掲示板 187-03